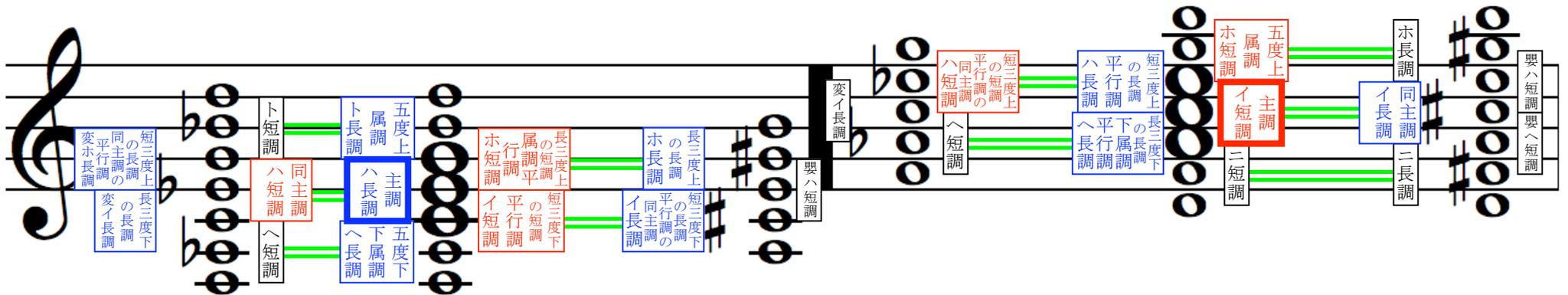


関係調

長調の関係調（ハ長調の場合）

短調の関係調（イ短調の場合）



「関係調」という概念について

「関係」といえば様々な種類の関係があり、近い、遠い、直接的、間接的などがあり、必ずしも決まった範囲を示さない。関係調は調号の類似性、主音の音程関係などで分類できる。もっとも代表的な関係は①主音の五度上の「属調」と五度下の「下屬調」（長調の属調と下屬調は長調、短調の属調と下屬調は短調）、②同じ調号を持つ「平行調」（長調の短三度下の短調、短調の短三度上の長調）、③同じ主音を持つ「同主調」（長調の場合同名の短調、短調の場合同名の長調）である。また主音が長三度または短三度離れている調の関係を一般的に「三度関係」といい、それを関係調に含める場合が多い。

ベートーヴェンのソナタでは第一楽章と他の楽章の調の関係、一つの楽章の中の主な調（特にソナタ形式における主楽節と副楽節の調、ABA形式におけるA

とBの調、ロンドにおける主部と中間部の調）の関係を見て、そこで実際に起こる関係を「関係調」とすれば、もっとも簡潔なルールとしてあげられるのは「二つの調が関係調であれば、その二つの主三和音に共通の音がある」といえる。（ただし後期の作品には若干の例外が見られる。例えば作品106のソナタでは第一楽章がB-Dur、第二楽章がfis-Mollであり、その主三和音b-d-fとfis-a-cisに共通音がない。）

このルールに従えば一つの主調から考えられる関係調は6種類の長調と6種類の短調が存在する。それを整理すれば関係調は主調の音階から構成される2種類の長調と2種類の短調（上記左右の図の真ん中にある三度列）と、その（主調を含めて）五つの同主調（長調を短調に換えたものは左、短調を長調に換えたものは右）と、それによって新しく構成される左右の三度列に新たに発生する三つの調である。

上記の図ではベートーヴェンのソナタで実際に出て来る関係調のみに説明を付けた。青は長調、赤は短調、緑の二重線は同主調関係を表す。（ベートーヴェンのソナタで関係調として出てこない調には説明を抜きにして、調名のみを黒で示した。）主調が長調の場合、ベートーヴェンは6種類の関係長調すべてと関係短調の内3種類を使っている。短調では3種類の短調と3種類の長調を使っている。短調で実際に現れる関係調が少ないのは、短調のソナタの数が少ないからだと考えられる。長調でもっとも多く使われる関係調は（頻度の順で）属調、同主調、下屬調、平行調である。短調では同主調と平行調がもっとも多く、それについて属調と下屬調平行調が多く使われる。ソナタ形式の副楽節は原則として長調のソナタでは属調、短調では平行調または属調である。（中期から例外が目立つ。）